

天球の音楽

(音信不通 ⑤)

奈良 敏行



四号に、麻野嘉史さんが、「見える世界がすべてではない」と書いたのを目にして、こんなことばを聞くのは何十年ぶりだろうと驚いた。こんな心遣いはいつか遠くに置き忘れてきたものだ。麻野さんの取り組みは本格的で、ゴリーの作品「ヴィイ」を端緒に研究をまとめている。ロシア語教師の山本千津子さんが、深く評価され友人にも紹介を開始している。

ところで、ヘンリー・ソローは、「あなたは、本を読むだけの人になりたいと思いませんか？」と問う。

《文字ばかりを読んでいては、世界のあらゆる出来事

が、隠喩によらず、じかに私たちに語りかける言葉であることを忘れる恐れがあります》（『ウォールデン 森の生活』今泉吉晴訳・小学館文庫）

ソローは、歴史よりも「目の前にある今」を大切にする。『ウォールデン』に「音」という一章がある。共振楽器工オリアン・ハーブが好きだし、フルートも演奏する。ソローは音楽以前の、「振動音」に耳をすまます。自然、そして空との共振を感じとる。それこそが、「じかに私たちに語りかける言葉」なのだ。このじかに語りかける言葉を「天球の音楽」という。天球の音楽というのは美しい言葉だ。ピュタゴラスとともに始まる問いのようでもある。見えるものの背後に、見えない秩序がかくされている。そのような気づきののだろうか。

わたしは残念ながら、「本を読むだけの人」なので、読みかじったものを並べることしかできない。でもそれはそれなりに楽しいので、自らは良しとしている。こんな話を耳にした。宇宙はビッグバンで始まったので、まず爆発の音響が原初にある。その振動音でいまだ宇宙がゆらいでいる。このことが、地上の秩序と関わっている。それを天球の音楽というらしい。

『星海の音楽』（工作舎）を読んでいたら、「地球をす

べての中心に安んじて据えようと、肉眼に見えることがらと一致する」「人間の小宇宙にとつては、地球中心論にもとづく体系はもつとも正確な天体図であり続ける」とあつた。むろん科学的には間違っている。この間違いの根本はなんだろう。わたしは「身の丈」という言葉が好きで、しばしば用いるが、本当には、身の丈のことは、身の丈の延長上で考えている限り、問題解決的には思考できない。しかし、このような解決は、ソロー的な世界では必要ない。「身の丈」に耳をすますることが大切だ。すると、天球の音楽と共振することができると。

わたしは、啓三さんが言っていたように、小説を読むのは好きではないし、小説に期待もしていない。ただ四六時中活字に触れていないと不安なので、読むものが見つからないときは仕方がないので、小説を手にしてしまう。『アラビアの夜の種族』は不思議な話で、そんな折、読了してしまつた。とても魅惑的な話だつた。著者の古川日出男さんの他の本も手にしたが、その感動はよみがえらなかつた。ただ『Gina』の中の「ぼくは音楽を聞きながら死ぬ」という短編に出合つてしまい気になつた。こんな会話があつた。「死ぬときに音楽が聞こえるんだよ、それだろう」とうもそうらしい。側頭葉の一部を刺激すると、この「天球の音楽」が被験者に聞こえる、と述べる。身の丈の内、

身の丈を超えず応じつづける「振動音」が、ここにもある。「ルイーザ・メイとソローさんのフルート」(BL出版)という本が鳥取県立図書館にあつた。長じて『若草物語』を書くルイーザが少女の頃、ソローの住むコンコードの近くに引越してきて交流をはじめた。その日々を絵本に描いたものだ。ソローの暮らすウォルデン池の周辺の豊かさが少女を育んでいく。ソローは散歩に連れ歩く。クモの巣を見つけると、「ルイーザ、妖精が落ちていったレースのハンカチに気をつけて」という。そしてときどきフルートを聴かせてくれる。ある三月の雪どけのはじまりの日、コマドリが、がんばれ、というような調子で春のはじまりの歌を口ずさむ。ルイーザもつられて歌いだしたくなる。自分もソローさんのようにフルートがふけたらよかったのに、と心がさわぐ。と、とつぜん音楽のかわりに、ことばがあふれ出してきた。八歳のルイーザは、こうして詩を書きはじめた、という話なのだ。天空の音楽が、身の丈に生きる人びとにギフトを与えてくれた時代の、ここを豊かにする話だと思う。

見えないものの方へと歩む。生活の単純化があり、ものがごとが簡単になる。そこからつむぎ出される物語とたくさん出会う。

(参考)

- シヨスリン・ゴドウィン 『星界の音楽』 工作舎 1990
- 古川日出男 『アラビアの夜の種族 ①②③』 角川文庫 2006
- 古川日出男 『Gift』 集英社文庫 2007
- ジュリー・ダンラップ他 『ルイーザ・メイとソローさんのフ
ルート』 B.T出版 2006